



福祉施設での経験を生かし、二人三脚で「農福連携」を実践している巧さん、愛さん夫妻

二人で歩む「農福連携」の道 全ての人が活躍できる社会を

竹内巧さん、
愛さん夫妻

合同会社「竹内農園」(北広島市)

農力
∞無限大

労働力不足が深刻になりつつある農業現場で、働く意欲のある障害者に活躍してもらう「農福連携」は今年、TOKIOの城島茂さんが構成員となつて注目された省庁横断の「農福連携等推進会議」の発足を受け、大きく動き出しました。

北広島市で合同会社「竹内農園」を切り盛りする竹内巧さん、愛さん夫妻は、新規就農した5年前の2014年から地元の福祉施設と農福連携の実践ノウハウを積み重ねてきました。昨年8月、農園を視察された上皇、上皇后両陛下から「工夫していますね」と、ねぎらいのお言葉をいただいたと話します。

「正直、『遠回りしたかな』という思いがあつたんですよ」——。200



インド勤務当時、同僚と記念撮影する巧さん(左)=巧さん提供

8年春、社会福祉法人・札幌この実会に採用された時の心境を、懐かしく振り返ります。知的障害者の日中活動を支援する通所事業も行っている法人で、巧さんは野菜・花の栽培を指導する花きグループなどの担当として3年間勤務しました。

当初は農業研修生として農業のイロハを学び、独立後に障害者と共に汗を流す「農福連携」を目指すつもりでした。しかし研修生として受け入れてくれる農場が見つからず、

印度で農業研究員として農業のイロハを学び、独立後に障害者と共に汗を流す「農福連携」を目指すつもりでした。しかし研修生として受け入れてくれる農場が見つからず、

たと言います。二人は12年に結婚し、

今5歳と2歳の娘に恵まれています。「先に(札幌この実会の)施設職員となつたことが、いろんな意味で僕の人生の大きなターニングポイントになりました」。

グローカル化に適した農業

もともとオートバイなどを製造する大手企業の経理社員で、05年から2年間、インドニューデリー市近郊に

「取りあえず福祉分野のスキルを磨くことを優先したんですね」。

ここで出会ったのが「海外研修も積んだ、筋金入りの福祉のプロ」と話す、3歳下の愛さんです。高校時代から障害者介護などのボランティアに奔走。北星学園大学社会福祉学部卒業後、札幌この実会の職員として活躍していました。

いつしか将来を誓う仲になり、巧

さんが「障害者が働ける農場経営を目指している」と打ち明けます。愛

さんは「障害のある人が働ける、『新しい居場所』をつくるんだね」と答えたと言います。二人は12年に結婚し、

今5歳と2歳の娘に恵まれています。「先に(札幌この実会の)施設職員となつたことが、いろんな意味で僕の人生の大きなターニングポイントになりました」。

工場を構える関連会社に出向します。現地従業員とふれあっているうちに、次第に膨らんでいったのが、「グローカル化」だったといいます。

「グローバルとローカルをミックスした混成語です」

とした上で、その頃、考えたことをこう話します。

「インド製オートバイの輸出構想が浮上し、盛り上がりっていました。地域の産物や産業を進歩・進化させていくと世界を相手に競争できる可能性があるということですね。僕は

学生時代(小樽商科大学)まで北海道で生まれ育った道産子です。もしも北海道でグローバル化を実現できるとしたら、『農業が一番だ』との思いに至り、(北海道での)就農を準備するようになつたわけです」

一方で、地域社会は老若男女で構



自慢のなす畑(右)と、巧さんが丹精して育てた出荷間近のなす

成されています。その中には障害者も健常者もいます。巧さんは「ハンディキャップの有無にかかわらずみんな『人的資源』です。この資源が力を発揮すれば地域が発展してにぎわうんじゃないのか。そしてそれを実現できるのも農業が一番じゃないか、と考えたわけです」と続けます。

11年4月、恵庭市にある道央農業振興公社の研修生として、同市内の（有）余湖農園（余湖智社長）で研修を積みます。全国優良経営体表彰の法人部門・農林水産省経営局長賞をはじめ数多くの受賞歴を誇り、直売所や食品加工施設なども経営している農園です。

ここでも3年間勤務し、耕起や播種、施肥、収穫方法など野菜栽培に関する基本技術はもちろん、農業機械の操作や販売・流通システム、接客といった農場経営全般について学びました。巧さんは「社長や同僚から、さもあり本当に貴重な体験になりました」と述懐します。

その余湖社長の骨折りで、北広島

市島松に「竹内農園」の看板を掲げ、念願の独立を果たすのは14年4月のことでした。

個性に合わせた作業を作る

特定非営利活動法人コラボ・ネットワーク運営の「ワークサポートサンスマイル」（塚辺博理事長）の事務所兼作業所は、竹内農園から3kmほど離れた北広島市輪厚の国道36号沿いにあります。近隣の障害者（利用者）15人が、ここを拠点に室内でできるチラシ折りなどや、除雪、清掃、棚つりといった施設外での作業をこなし工賃を得ています。

9月19日午後——。巧さんが真っ赤に色づいた調理用トマトを作業所に搬入しました。利用者たちは作業台の上にトマトを載せ、付着している土を布できれいにふき取った後、はかりにかけて400gずつに分け、袋詰めします。室内のホワイトボードには、野菜の種類ごとに簡単な作業工程や1袋ごとの重さなどが記入されていて、利用者がボードを確認しながら、黙々と作業に当たっていました。

竹内農園は、オープンしてしまった14年から同法人と「農福連携」を続けています。野菜の播種や施肥、定植、除草、収穫など農園で行

う屋外の作業もあります。塚辺理事長は「仕事があれば気分転換できるし、離れた北広島市輪厚の国道36号沿いにあります。近隣の障害者（利用者）15人が、ここを拠点に室内でできるチラシ折りなどや、除雪、清掃、棚つりといった施設外での作業をこなし工賃を得ています。

とのお付き合いが始まっています。塚辺理事長は「仕事があれば気分転換できるし、離れた北広島市輪厚の国道36号沿いにあります。近隣の障害者（利用者）15人が、ここを拠点に室内でできるチラシ折りなどや、除雪、清掃、棚つりといった施設外での作業をこなし工賃を得ています。

から利用者の表情が生き生きとしています」と話します。目を細めます。16年からは「北ひろしま福祉会」との連携もスタートし、同じ年には引きこもりがちだった青年を受け入れました。

「他人とコミュニケーションを取るのが苦手な若者なんですが、作業を頼んだ日は休まず来てくれるし、まじめに働いてもらつてい



1.ワークサポートサンスマイルの塚辺理事長



3



2.作業手順などをメモ書きしているホワイトボード

この秋、青年と一緒に取り組んだズツキーニ収穫の様子を動画撮影しました。巧さんが一人で作業する様子と、青年と巧さんがペアで行つたものの2種類を撮影。どちらもコンテナ数台を載せた二輪車を畠と畠との間に置き、①市場に出せるズツキーニを見つけて摘み取る②いっぱいになつた

コンテナと空のコンテナを入れ替える③二輪車を順次、押していくーという手順です。

巧さん一人で行つた前者に比べ、青年が②と③を担当した後者は驚くほど時間短縮につながつたといいます。

「例えばバーコード貼りが得意な人がいます。僕が栽培技術を磨いて収穫量を増やせば、バーコード貼りの作業

も増えます。それぞれの得意分野を見つけ、それに合わせたきめ細かな作業を作つて『適材適所』を図つていくのも僕の仕事です」と力を込めます。

忘れぬご視察

昨年8月3日、上皇、上皇后両陛下が竹内農園を視察されました。

「緊張のあまり、断片的な

記憶しかないです」と振り返りますが、「とても工夫されていますね」、そして「大切な仕事をされてい

ますね」というお言葉だけは、しっかりと脳裏に焼き付いていると言います。



葉物野菜の生育状況を確認する巧さん



冬期間を除いて野菜を栽培しているビニールハウス

「お会いした時、まるで『心の大きなお父さん』と『心の優しいお母さん』に

抱かれているような気持ちになりました。その印象は今も変わりませんし、僕の人生にとつて決して忘ることのできない思い出になりました」

約2haでスタートした竹内農園の経営面積は4ha近くにまで広がり、野菜の種類も徐々に増えて、今年は15品目を栽培しました。

組織が最もパフォーマンスを発揮できる状態を「全体最適」、逆に組織の一部が最もパフォーマンスを発揮できることを「部分最適」といいますが、巧さんは「農園では僕が全体最適化、妻が部分最適化を担当しています。でも、時々立場が入れ替わっていることに気付きます」と話し、笑みをこぼしました。



1.竹内農園の看板 2.にんじん畑で農作業に当たる巧さんと愛さん



2